

2011年6月30日

質問:

第5のディシプリンが希望や可能性につながるということですね。私たちを勇気づけてくれるような希望の傾向や例があったら教えてもらえますか？

ピーター・センゲ:

いいですとも。私個人の意見としては、私はものすごく幸運なんです。なぜなら、私のまわりには常に、この視点から行動し、こういったツールを用いて本当に驚くべきことを成し遂げるような人たちがいて、そういう人たちと近づきになれるからです。およそ1カ月のうちに私たちは、学校教育にシステム思考を取り入れて驚くべきことを行っている教育者が北米じゅうから集まる会合を開きます。その中には、幼い子どもたちに教えている人もいます。5～6歳の子どもというのは生まれながらのシステム思考家なのです。

私たちは今、ここオレゴンで持続可能な食料会議に参加しているわけですが、これは食料システムの変革のために大変な努力をしている人たちのひじょうに特別な集まりです。目覚ましいことを実践している人たちの話にたくさん出会います。でもこの会議では、特に珍しいことではなくなってしまうそうですけどね。

昨日、私たちは、アメリカで2番目に大きい小売業で働いている弁護士の女性と話をしました。その会社はウォルマートに匹敵するような巨大小売チェーン、コストコに勤めています。ウォルマートがアメリカ最大の食品販売企業で、コストコが2番目です。

この女性はコストコで弁護士として働いていましたが、地方の貧困や土壌の喪失など、食料システムに組み込まれたあらゆる不均衡の問題への懸念をどんどん募らせていって、何かをしなければならぬと訴えていました。「会社は何か手を打つべきだ」と上司に説得を試みつけたのですが、上司の答えは「何をすべきかなんて知らないさ。われわれはただここで事業を営んでいる。それだけさ」でした。

10年後、女性はこの社会全体に対する一種のインスピレーションを得て、弁護士の職を離れました。そして、購買担当者としての教育を受け始めたのです。つまり、コストコでの上級弁護士かつ企業幹部という立場を捨てて、いわばサプライ・チェーンの1年生になったわけです。しかしこの女性は2、3年もすると、中米やアジアなど世界中のプロジェクトを担当するようになっていて、食品のサプライ・チェーン全体——食料の生産地である農業や漁業を営むコミュニティから、最終消費者に販売される場所まで——をどのようにマネジメントすることができるかを見出そうとしていました。そこに関与するすべての人の健康と幸福のためにどのようにサプライチェーン全体をマネジメントできるか、をです。

コストコで得た大きな学びの一つについて彼女はこう語っています。「かつての私たちは小売業者として食品を買っていました。卸売業者から買っていたのです。今では農産物生産者から買っています。そのおかげで生産者のことを思いやるようになっていました。これは一つのちょっとした逸話にすぎませんが、このような話はたくさんあって、人々は少しの気づきと少しの意思をもってものごとを見るようになっていました。それによって基盤にあるシステムの形を変えることが可能なのです。